

私と有明海

Chronicle Ariake Kai 10th 有明海歳史。 Chronicle Ariakekai

会員それぞれの有明海



御船山・杵島山そして有明海

井上一夫

御船山の山頂（上宮）には住吉宮（海の神）が祀られている。下宮は隣町（朝日町）にある黒尾神社である。そう高くもないその境内に立つと、六角川を通して有明海を望むことが出来る。その下宮の場所を示唆してくれたのは哲学者・梅原猛さんである。地元では武雄神社の参道の横にある小屋の建物を下宮と呼んでいたが、梅原さんはそのことを否定し下宮は水田を一望に見渡せる場所に祀られている筈だ、と教えてくれた。武雄神社の神様は春に黒尾神社（下宮・田宮）に下り、六角川流域の豊作を見届け秋に武雄神社（中宮・里宮）にご帰還するのである。GPSも無い時代に先人の地形の読み解き方に感服するが、杵島山を避けて六角川の河川の上を通して白石平野と有明海を眺望できる場所に、田宮（お旅所）を配置していたのである。

大昔、御船山は有明海の湾奥に位置していたという。その有明海に火山島・杵島（山）が隆起したことにより、武雄は盆地型市街地を形成することになった。その結果、有明海を直接望むことは難しくなったが、その杵島山を通り越して御船山の近くまで有明海の潮流が遡上してくる。このような低平地の悠々の営みや、先人の知恵などから「武雄の前海は有明海である」ことを意識し、山・川・海のつながりを大切にしたい暮らしを組んでいきたいものである。



古代人の有明海

竹下 泰彦



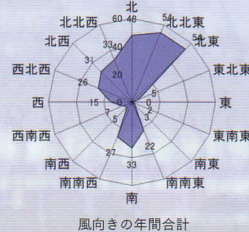
佐賀地方気象台の風向きのデータを調べてみました。（下図）北から北東にかけての風がほとんどです。波の高さは風の強さと、風が吹き続ける海面の長さによって決まります。これを吸送距離と言います。有明海の湾奥では、同じ風速でも南から風は高い波を引き起こしますが、北風は吹き続ける距離が短いので、南風のそれと比べて穏やかな波です。つまり有明海の湾奥は静かな海です。

東名遺跡や吉野ヶ里遺跡で暮らしていた古代人にとって、有明海はどんな海だったか想像してみました。

近くの川に小船を浮かべれば、引き潮が勝手に沖へ導いてくれます。頃合を見はからって棒を海底に突き刺し、しばらく待てば干潟が現れます。そこには、まさに無尽蔵の海の幸が「さあ採ってくれ」と待っています。

そして、のんびりしていれば、また、満ち潮が勝手に陸地まで船を戻してくれます。しかも先ほど述べてように、波が穏やかな人に優しい海です。古代人にとっては、まさに神様が与えてくれた奇跡だったでしょう。食べ物に困らない海です。そんな暮らしをタイムスリップして覗いてみたいですね。

このため古代人は、大川風浪宮の「沖詣り海神祭」のように、海の幸に感謝したのでしょう。そんな海が身近にあったことを改めて感じています。



有明海との縁

川上 善幸

私は現在、有明海ぐるりんネットのほかに有明海再生機構に関わっています。私が有明海問題に取り組むきっかけになったのは、佐賀に来て2年目でしたが、年始のあいさつ回りのお酒が入った席で、菊池元西日本佐賀総局長と北島さんの3人で話が盛り上がった際に、「何か、佐賀を元気にすることをしよう」と話したことが始まりでした。何をしようか、3人3様の意見が出ましたが、利害が絡まない「有明海問題」を私が提案して方向付けができたように記憶しています。もう一つ、個人的な思いとして、「有明海研究所」を作りたいということがありました。有明海異変後に諫早湾干拓事業の推進の是非を巡って賛否両論がありましたが、当時、科学的根拠に基づいた冷静な議論になっていませんでした。そこで、この問題に対して、有明海問題のビジョンを考える「有明海再生機構」と運動を行う「有明海ぐるりんネット」の両輪でスタートすることにしました。早いものでそれから10年の月日が流れましたが、この取り組みはこれからが正念場です。

私と有明海

Chronicle Ariake Kai
10th
有明海歳史。
Chronicle Ariake Kai

会員それぞれの有明海



有明海と伝えたい「食の文化」

田崎 陽子

私が住んでいる佐賀市も面している「豊饒の海 有明海」の食材の豊かさ、ユニークさは他に類を見ない素晴らしいものだと考えています。有明海のもたらす食材とともに、沿岸地域で育まれたさまざまな「食し方」は、次世代に伝えるべき、日本の「食の文化遺産」です。干潟の海ならではの多くの個性的な食材が、生きていく上の栄養としてだけでなく、沿岸地域の「食の文化」を一層豊かに育てました。

さて、有明海は様々な種類の貝類が生息しておりますが、その中で「サルボウ貝」は庶民の食卓を代表する食材として安価で親しまれており、昔から炊き込みご飯や大根の煮物などによく使われてきました。今、有明海ぐるりんネットでは次世代に食文化を伝えていく試みの一環として、サルボウの新しい食べ方として佐賀特産のトマトと融合させた「サルボウとまとソース」を紹介しています。その他にも、有明海を代表する食材に「海苔」があります。有明海の独特な自然環境で育った海苔にはうまみ成分が多く、豊富なミネラル分も含んでいるため「海の野菜」ともいわれます。特別な工夫をせず、焙っただけで白ごはんを食べられるこの海苔は、「食卓の豊かさ」を演出します。

最後に私も微力ではありますが、今後も地域に根差した食文化の素晴らしさを伝えていけたらと考えております。



回顧録 美味しい前海もの二品

古賀 正信

佐賀市に生まれ育ち多分一生を過ごすであろうこの土地の切っても切ることができない食べ物は有明海の幸・前海ものです。

記憶に残る最初の前海ものは、大きな大きな牡蠣（せっか）です。小学校低学年の寒い冬、父の友人が届けてくれた、とても大きく分厚い牡蠣。勿論その頃は天然もので、両手で抱える大きさだったと記憶しています。当時唯一の暖房である火鉢で焼いて食べました。私には大き過ぎるばけ物牡蠣が、炭火の熱で次第に身をくねらせ、湯気を噴き堪りかねて口を開ける。そこに醤油を垂らして食べることは、至福の時でした。父は牡蠣を肴に熱燗。いい時代でした。

次に忘れられないのは、絶滅しかけたむつごろう。今では見かけない程の大きなものでした。「むつごろうはいらんかえ」と水を少しはった木桶に生きたままのむつごろうを入れ売りに来ていました。この売り方は60年代後半まで続いていた様に思います。ある夏の午後、母が生きたまま串刺にして庭で素焼きにし、甘辛醤油で煮て出してくれました。美味しさのあまり20匹も食べた覚えがあります、今では懐かしい思い出です。これが私の“お袋の味”一番となりました。



ナルトビエイと共に

高橋 勝則

あれは、有明海ぐるりんネットに加入してから間もないころだったと思います。

同じ頃「有明海に生息するナルトビエイ事業化説明会」が玄海水産振興センターで行われ、それに出席しました。それを機に、有明海の厄介者「ナルトビエイ」の事業化を模索し、四苦八苦していた時です。ぐるりんネットの会員の方が、「高橋君、ここにナルトビエイ肉の効用についての論文がある。この先生に会ってみたら。」と促されるまま、当時佐賀大学の教授の柳田先生に出会うことになりました。先生は、「砂漠から金を拾うような事かもしれないが、ナルトビエイペプチドを作ってみよう」ということになりました。ナルトビエイに出会って、かれこれ10年以上になりますが、2014年夏、ついに「ナルトビエイペプチド」に関する特許を取得する事が出来ました。ぐるりんネットの人達に出会うことがなかったら、特許取得など夢のまた夢だったと思われます。今後は、この特許を何に活かしていくかというステージに入ります。ぐるりんネットのおかげで事業が成功したと言える日が来る事を夢見て、有明海を宝の海にするために微力ながら、これからもがんばりたいと思います。



初めて出会った佐賀の海は「濁」でした。

宮崎 純子

正直、ショックを受けました。

海が泥だらけという概念は皆無でありましたし、それに対して魅力を感じず、故に、海を眺めに行くという行為にすら至りませんでした。

しかし、「有明海ぐるりんネット」と出会うことにより「濁」の海は「豊饒の海」であることを学びました。

何よりもまず、海苔は味付け海苔しか食べた事が無かった私に「日本一の有明海苔」の味は衝撃的な美味さでした。

軽く炙った海苔を口にした時の鼻腔に広がる潮の香り、微かな甘み、舌に残るまろやかさ、あの幸福感を忘れられません。「食べること」から入門した有明海ですが、それと同時に直面する危機をも知ることとなり、人や自然にこんなに豊かな海の恵みを後世に残していかななくてはならない責任を、食を通して学びました。有明海に携わり生活を営む人々が抱える問題が他人事ではないことを人々に伝えるにはどうすれば良いのか、ラムサール登録などの環境保全運動を一端とし伝えていきたいです。私は難しいことは上手く言えませんが、有明海を多角的な面から人々に関心を持ってもらえるよう努力を惜しみはしません。

これからも美味しい有明海苔を食べる為に。



山、川、海の連携で宝の海の再生を

西村 宏之

2004年(平成16)年4月、私は佐賀県有明海再生課勤務となり、「県民協働で、山、川、海の連携により、有明海の再生をめざす」ことが課の目標の一つとなりました。

その一翼を担ったのが当時発足したNPO 有明海ぐるりんネットでした。

ぐるりんネットのこれまでのイベントやシンポジウムの活動では、特に、有明海の食(のり、魚介類、鹿島の酒、郷土料理など)、絶滅危惧種の渡り鳥やムツゴロウなどの生き物、七面草、干潟を活用した遊び、山や川、水とのかかわり、地域の祭り等に関心を持ち、他の多くのNPO、県民、行政等と連携し、会員みんなが、楽しみながら有明海再生を支援してきたと思います。

冊子「有明海」の発行も10号目を迎え、第1号からこれまでに掲載されてきた紙面は、味わいある文章や有明海の美しい写真で満たされ、みんなに有明海の奥深さを印象づけました。

また、東与賀干潟に関し、2014年(平成26年)にラムサール条約の登録湿地をめざすシンポジウムでは、多くの地元の方々の協力を得ることができました。登録が実現すれば、有明海干潟の渡り鳥をはじめ、干潟の環境、沿岸地域の観光や特産物に多くの関心が集まるものと期待しています。

干潟が海をきれいにするーウソ、ホント?ー

田端 正明



有明海異変が起きる前年(1999年)に、小生が出版社から依頼され執筆した原稿に「干潟が海を浄化する」とタイトルをつけて提出した(化学、59巻、No8、1999)。出版社は信じられなかったのか「干潟が海を浄化する?」と疑問符をつけた。今日では干潟の浄化作用を疑う人はいないだろう。しかし、有明海異変が起きる前は九州以外の人には有明海のことは全く関心がなく、ただ濁っていて汚い海としか考えていなかった。そのために、小生の論文に疑問符をつけたのである。これに先立って小生が日本分析化学討論会(熊本、1998年、5月)で発表した時には、諫早湾がギロチンによって完全に閉め切られた(1997年)直後であり、環境への世論の関心の高さを反映して、西日本新聞は小生の学会発表を一面に掲載した(1998年、6月17日、朝刊)。

有明海及び玄海灘で底泥とアサリを採取し、重金属イオン濃度を分析した論文である。有明海では玄界灘と比べて、泥干潟ほど金属濃度が高かった(図1)。しかし、生息するアサリ中の重金属濃度は玄界灘のアサリと比べて泥干潟のアサリが低かった(図2)。きれいな海である玄界灘に生息するアサリが高い重金属濃度であった。即ち、泥干潟は河川から流入する重金属を濃縮し、棲息するアサリへの重金属濃縮を抑えている。生物はその棲息環境の影響を受けやすいが、有明海の干潟は生物への環境汚染を防いでいる。

約16年前の研究発表であったが、当時の世論の有明海への認識はこの程度であった。

有明海の干潟の重要性を今後も継続的に主張続けるべきと今改めて認識した。

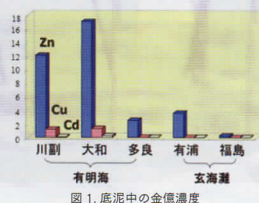


図1. 底泥中の金徳濃度

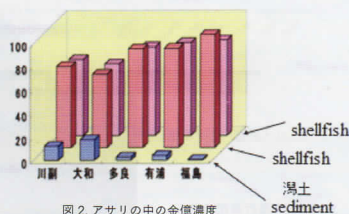


図2. アサリの中の金徳濃度

東与賀干潟・海岸の貴重な価値を ラムサール条約湿地登録へ

東島 清司



東与賀海岸には、昭和天皇、今上天皇御二人の行幸記念碑が建立されています。

昭和62年5月に昭和天皇は佐賀県嬉野町で開催されました、第38回全国植樹祭への御臨場に合わせて、地方事情御視察のため東与賀町に御来町、東与賀海岸から有明海を御視察になり、干潟に棲息する魚介類や野鳥、また、海岸線に群生する塩生植物を興味深く御視察をされました。

この時の御来町を永く記念する碑が東与賀海岸に建立されております。この碑には次のような御製歌が刻まれています。

面白し 沖へはるかに 汐ひきて 鳥も蟹も見ゆる 有明の海

この行幸記念を契機に塩生植物シチメンソウが一躍クローズアップをされるようになり、今では東与賀のシンボリックな存在となっております。また、平成18年10月には第26回全国豊かな海づくり大会における放流行事が開催され、今上天皇、皇后両陛下も東与賀海岸での行事にお見えになり、ムツゴロウの御放流とノリの元種をカキガラへおまきになられました。これを記念した碑は大会の意義を後世に伝えとともに、佐賀県の豊かな海を守り続けられることを願い建立されたものです。この碑には全国豊かな海づくり大会における放流行事の情景をお詠みになられた御製歌が刻まれています。

眼前に 有明海は広がって 今年生まれし むつごろう 放つ

このように御二人の天皇様に東与賀海岸に行幸頂いたことは、地域住民は元より県民にとりましても、この上ない喜びであり、有明海東与賀干潟・海岸の貴重な価値を大切に保全し、子どもたちに引き継いでいくためにもラムサール条約湿地登録が望まれるところです。

東与賀まちづくり協議会が推進してきたラムサール条約湿地登録については、2015年6月に南米のウルグアイで国際会議が開催されることになっており、是非この登録が実現することを心より願っております。



上/昭和天皇行幸記念碑
下/今上天皇・皇后行幸記念碑

私と 有明海

Chronicle
Ariake Kai
10th
有明海歳史。
Chronicle Ariakekai

会員それぞれの有明海

有明海を観るまなざし

服部 二郎



童謡詩人金子みすゞさん(1903~1930)の作品に「積もった雪」という詩があります。『上の雪さむかるな。つめたい月がさしてゐて。下の雪重かるな。何百人ものせてゐて。中の雪さみしかるな。空も地べたもみえないで。』

(引用:「新装版金子みすゞ全集」JULA出版局) 雪を三層のまなざしで観ているように、有明海という綿津見(わたつみ)を上津(海苔)・中津(魚類)・底津(貝類)への三層のまなざしで、観ることがとても大切なことです。

古来より先人は、山川草木すべてに神やどるとして、自然を畏れ自然に順い、人間行為のゆき過ぎるのを自重自戒し、自然との共生生存につとめて来ました。病める有明海。その治癒・再生に必要なことは、生態系バランスを海の三層はもちろん、山川平野海という場をめぐる水循環を合せて、自然が再生できる範囲にとどめることを前提として行くことです。

「東よか干潟」が、ラムサール条約登録湿地に認定されるのを契機に、環有明海ぐるりん八千km²での、農林水産業(生命産業)がワイズ・ユーズによって、生物多様性の保全・再生が担えること。これまでのゆき過ぎた量でなく、良質の産物をうみだしていくこと。そんなおもいをめぐらせています。

福所江防潮水門（三丁井樋） 改築の思い出

深町 淑郎



私は佐賀県の土木技術職員として奉職し、今は定年退職している。有明海との関わりは、勤め始めて10年目位に小城土木事務所（当時）に配属され、福所江防潮水門（三丁井樋）改築を担当することになった時である。それまで、山間部の道路や砂防工事を担当することが多かった私は、超軟弱な有明粘土や干満差の大きい有明海との格闘が始まり苦労することになった。

福所江は芦刈町と久保田町の間を流れる川で、そこにある三丁井樋とは河口の防潮水門である。以前三つの木製の招扉があり、それで命名されたと思われる。「（小城郡村史）に海潮を防ぐ閘門を設置するが鹹（かん）気（き）猶甚だしい」とあり、塩水が漏水し遡上していたことが窺える。構造は二連の鋼製スライドゲートと通常排水用に両脇に小さな鋼製招扉を設置することにした。洪水時にはスライドゲートを上げ排水し、通常は昔のように海面が低下したときに招扉で河川水を流す仕組みである。軟弱な基礎地盤への対応や施工時の干満の差を考慮した仮設工などに苦慮し、設計から施工まで3年かかった。それを最初から完成まで携わることができたことは、生涯の良い思い出になっている。



アゲマキよ、ふたたび。

吉村 弘美

ひょんなことから有明海ぐるりんネットに出会い、会員の皆様の「有明海が好きで楽しんでいるだけだよ」とさりとおっしゃるそのスマートさと気さくさに加え、常に自分自身が楽しんでいる姿勢がとても魅力的で、また有明海も知れば知るほど恵み豊かでおもしろくていつの間にか魅せられてしまい、私も平成19年度に有明海ぐるりんネットに仲間入りしました。

私自身は自分の都合が合う時に楽しむばかりで活動自体はほとんどできていないので（身体は大きいのですが）肩身は狭く、でも皆様のおかげで有明海をホントにホントに好きになりました。ムツゴロウの目がハート形にはビックリ！

潮の満ち引きを遠浅の海の真ん中で待つのが潮干狩りでタイラギを自分で獲ったことが何よりの自慢です。

これから先、有明海が昔に完全に戻ることはできないかもしれませんが、どうしても復活してほしいのは「アゲマキ」。アゲマキが獲れていたころの有明海は豊かだったし、小さい頃から食卓に当たり前のようであったので、もう一度あの美味しいアゲマキを思う存分食べたいです！ Come back again、アゲマキ！



日本酒仕込み水 有明海に注ぐ河川と酒蔵

古川 正敏

生まれ故郷の佐賀を3歳で出て55年後に戻り、住み着くようになって10年。有明海ぐるりんネットや異業種交流会の楽しみは、懇親会での「佐賀の酒で乾杯」！

佐賀県内23軒ある酒蔵の酒はほぼ味わい尽くし、同じ山系・河川からの仕込み水も山麓の伏流水と河口付近では味が違うとか、一人前に話すようになった。

さて、有明海に注ぐ一級河川；8河川流域から仕込み水を採っていると思われる造り酒屋で、佐賀の2河川を除き呑んだことがある酒を思い出すまま挙げてみる。

一番西の本明川、昔諺早には数軒酒蔵があったが現存しないらしい？。筑後川は、上流から九重「八鹿」日田「薫長」田主丸「若の寿」朝倉「国菊」城島8蔵「池亀」「有薫」「花の露」「比翼鶴」「杜の蔵」等、河口の大川「若波」「清力」。矢部川は、上流の黒木「旭松」八女「繁樹」「喜多屋」柳川三橋「国の寿」。菊池川は、菊池「菊の城」緑川流域から菊池に移った「美少年」山鹿「千代の園」。白川は、阿蘇高森「靈山」だけ？。緑川は、上流の山都町「通潤」河口の川尻「瑞鷹」。

熊本は球磨（米）焼酎が主流。やはり九州の酒は佐賀と福岡が最高だ！仕事を辞めたら、各河川の有明海河口から上流まで、バスと徒歩で酒蔵を訪ねてみたいものだ、「利き酒」に車はNGだから…。



私と有明海

Chronicle AriakeKai
10th
有明海歳史。
Chronicle Ariakekai

会員それぞれの有明海



佐賀海苔との出会い・付き合い

三橋 武芳

私の有明海との付き合いは、1983年（昭和58年）4月の定期異動により水産室漁港課に転勤した時に始まります。

私にとって漁港課は、初めての本庁勤務でした。本庁勤務でありながら、出先事務所がなく、自らが上京して国に対して漁港改修計画の説明を行い、補助金を要請し、補助金を獲得すれば工事発注を行い、工事監督をするところでした。また、市町が管理する漁港の整備を指導する10数名の課でした。

漁港課では、玄界灘と有明海に面する漁港の整備改修の担当でした。あるとき、漁港課の先輩に生海苔の焼いたものを1枚すすめられて、感想を求められました。今まで味わったことのないような柔らかいとてもおいしい海苔だったので、その旨伝えたところ、1枚が100円すると聞いてびっくりしました。

それからです。普通に市販されている海苔では物足りなくなり、海苔生産者の方から直接佐賀海苔を分けていただくようになり、おにぎりに海苔を巻いて食べるのがこのうえなく美味で、佐賀海苔が大好きになりました。

2001年（平成13年）4月佐賀県東京事務所に勤務した時は、有明海のノリが採れなくて全国的に騒がしくなった時です。翌年には有明海を再生するための特別措置に関する法律が制定されました。私は、東京の方々に佐賀県をPRするために名刺代わりに佐賀海苔を小分けして渡すこともしました。とても喜ばれていい宣伝にもなりました。また、年に1回国土交通省担当佐賀県人会を開催していましたが、打ち合わせの時、佐賀県産品をお土産にとの要望を受け、佐賀海苔を佐賀から取り寄せて配布したところ、ちょうど話題の時期でもあり、美味なうえに、お土産には軽くて大変喜ばれました。

佐賀に帰ってから、有明海ぐるりんネットに加入していろいろなことを学び、活動することで、有明海がさらに身近になったことは言うまでもありません。また、佐賀県で初めての地域高規格道路「有明海沿岸道路」の担当になったのも有明海との縁からだと思っています。



有明海の幸を食べる。サルボウとまとスープ！

古川 尋美

ぐるりんネットは、有明海の楽しみの一つに“食べる”を掲げています。その一環として、有明海サルボウ貝をメイン食材とした新たな食べ方を提案し、消費拡大の応援をしようということになり、友人でもあるキュービー株式会社 研究開発本部の原さんに相談したところ、佐賀の海の幸と陸の幸を合わせた「サルボウとまとソース」を提案してくれました。

2013年1月からイメージを膨らませ、翌年2014年4月のぐるりんネットの定例会において、会員全員一致の賛同を得、ぐるりん発B級グルメを作ろう！とそれは盛り上がったものです。その後、試作を繰り返しながら出来上がったのが、サルボウ貝トマト焼きそばです。

サルボウ貝の活かし方に苦労しました。

- ・野外でのイベントにも活用できること
- ・色が赤みなので、トマトの赤色とあわせることにより、パスタ料理のボンゴレロッソを和風にアレンジ
- ・スクランブルエッグで蛋白系のうま味をアップし、佐賀の美味しい野菜をいりどりにたっぷり使う
- ・トマトソースのトマトは、佐賀県産の高糖度トマトを使用

などなどです。サルボウとまとソースだけでも美味しいのですが、ここから色々アレンジして、我が店の看板レシピにいただける応援団のお店が出てきたらいいと思っています。有明海の幸は、じっくり味わう故郷のおふくろ料理、心に残る食材たちです。



2014 年度の活動を振り返って

事務局 古川 尋美

例年の如く活動の中心である定例会は、これまで通り毎月開催することができました。昨年同様、有明海沿岸域での出張定例会（柳川、大牟田等を予定）の実現を模索しましたが、残念ながら実現には至らず、来年度へ持ち越しです。しかしながら、今年も講師は多彩な顔ぶれで内外の話題満載、充実した内容でした。

平成17年度の創刊号以来、毎年1号ずつ発行してきた冊子「有明海」を、本年度も佐賀県有明海漁協及び福岡都市圏広域行政事業組合の支援を得て第10号を発刊することができました。図書館、公民館等々に寄贈するとともに、広く県民の皆様にご覧いただきたいと思っています。この第10号は、NPO法人発足当初目指していた10号までの達成目標号となることから、これまで活動で得た有明海の魅力と課題に関する会員からの原稿を中心に構成することで、来年度からの新たな活動エネルギーを得たいと考えています。

昨年度来、東与賀干潟のラムサール登録を目指して環境省との共催で開催した「東与賀干潟シンポジウム」の成果をもとに、7月に佐賀市が開催するシンポジウムの事務局の一部を担当し、ラムサール登録の実現を目指す一役を担いました。

さらに、5月に開催された鹿島ガタリンピックに参加のほか、10月と11月にはSAVE JAPANプロジェクトのご指名をいただき、子供達中心のイベント「干潟の生き物ウォッチング」と「身近な池の生き物を調べよう」を開催、沢山の方々の協力の元、大成功に至りました。このように、有明海流域で活動するNPO法人などの団体と交流を深めることにより、ますます“有明海ぐるりん”を推進していきたいと願っています。



耳の悪い人にも見て頂く～字幕入り DVD 完成～

北村 和秀

有明海ぐるりんネットの活動は、幅広くあります。その一つに、有明海検定があります。身近なことから有明海での漁業に至るまでをクイズにした検定試験です。受験には、九州一円から訪れ難問を意図も簡単に正解する受験者など居ました。

それを低学年でも解けるように、分かり易く解説したDVD「おもしろ! ぐるりん検定」を制作しました。

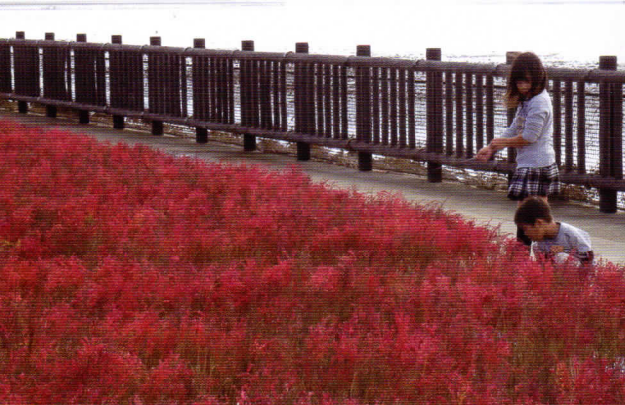
また、白石町で約百年前に実際に起こった高潮被害を、紙芝居して出前講座などで伝えて来ました。その後、プロのナレーターに朗読を依頼し、2本目のDVD「高潮漂流記」を制作しました。2つとも評判も良く、大勢の人が視聴しました。

佐賀県聴覚障害者サポートセンターでは、このDVDに字幕を入れ、聴覚障害者の人たちにも見て頂こうと平成26年度の事業として「字幕制作ボランティア養成講座」を開きました。受講者の主婦ボランティアが講座を受け

ながら、苦労を重ねて2本のDVDを分かり易い字幕にて完成させました。この図書DVDは、事務局または県聴覚障害者サポートセンターで貸し出されています。



上／おもしろ! ぐるりん検定
下／高潮漂流記



NPO法人 有明海ぐるりんネットの 10年を振り返って

代表理事 荒牧軍治

設立趣意書

私がいつも持ち歩いているモバイル型のハードディスクの中に、2004年（平成16年）5月10日作成の「NPO法人有明海ぐるりんネットの設立趣意書」を見つけました。法人の設立認証と登記が翌年6月ですから、法人設立のほぼ1年前に書き上げたものです。有明海ぐるりんネットを設立して何をしたいのかを気恥ずかしいくらいの高揚感に満ちた文章で書き記し、法人に参加してほしいと訴えています。原点に戻る意味で、ちょっと長くなりますが引用してみます。

『今は確かに問題を抱えてはいるけれども、間違いなく優れた資産である有明海を子供たちにどう伝え、教育にどう生かすか、有明海沿岸域住民が有明海を中心にどのように連携し有明海を楽しむか、我々の楽しみを他の地域の人々にも伝えてどう観光に生かすかといった課

題の追求は、他の真似ではない独創性を我々に要求するはずで。水環境問題を連携軸とした福岡都市圏、筑後川水系域との交流は、この地域に暮らす誇りを我々に与えてくれるでしょう。有明海に関する知識と知恵を共有化し、有明海と共生する暮らし方を探り、行動する組織として、NPO法人「有明海ぐるりんネット」を結成したいと考えています。多くの方が参加されることを呼びかけます。』

趣意書に添付した図面には、有明海沿岸域と筑後川等の水系域そして福岡都市圏までの連携を目指しているのが示されていますし、法人名「ぐるりんネット」にはその中核組織となる意思が示されています。

趣意書に示した行動目標の何ができ、何ができなかったのか。有明海ぐるりんネットの10年間を振り返ってみます。

10年間で確実にできたこと

熱い思いと高い目標を掲げて行動を開始して10年、確実にできたことと云えることは、冊子「有明海」を10号まで発行できたことと、月1回の例会と交流会をほぼ休むことなく続けられたことくらいでしょう。

冊子「有明海」が休むことなく発行できた理由は、北島悦子編集長が一度も「休刊する」と言わなかったことにつきます。生活パターンが変わって集中できないときもあったと思いますが、それでも原稿が遅れがちな会員を督促して執筆させ、地味な編集・校正を経て、10号出版にまでこぎ着けてきた編集長の「粘り」に敬意を表します。ありがとうございました。

冊子「有明海」の出来映えも自慢でるものです。6号を除き全て号の表紙を飾った北村カメラマンの有明海の風景は、私たちが、なかなか目にする事のない奇跡的な美しさです。中身だって負けていません。有明海の干満の不思議、各地で楽しんだ祭りや食と酒、古事記の原点は有明海に間違いないと思えた神話の数々、そして何より、干潟の上を這い回るムツゴロウやトビハゼ、そしてシギ・千鳥の群れ。どの号にも有明海の魅力が溢れています。また、佐賀県有明海水産振興センターの川村さんの「今年





の有明海」は、私たちがお願いして2号から10号まで書き続けていただきました。貴重な有明海の記録になると思います。

これまで出版した9号までの冊子は、スキャナーで読み込んでいつも持ち歩き、時々眺めては悦に入っています。地道に続けることで生まれた豊かさです。

例会を毎月続けてきたことも自慢できる実績だと言いつけることにします。「仲間内で話し合っ、酒を飲んでいただけ」と悪口が聞こえてきそうですが、「悔しかったら、やってみろ」と啖呵を切っておきましょう。毎月3〜4時間、有明海の魅力を大声で語り合う集団が他にあったとは思えません。少なくとも20名の「有明海好き」が徒党を組んでいたことの電磁波を佐賀から発信できたと思います。また、話題提供者に有明海関係者以外の方を数多くお招きしました。異分野の話を聞くことで私たちの視野が広がったのは確かですが、講師の方には交流会への参加も義務づけていましたので、確実に「有明海好き」ウィルスを感染させることができたものと確信しています。

次の種もまくことができました

マスコミは「宝の海有明海」と書いてくれるけど、「佐賀の人たちは有明海が好きか」と聞かれたら、多分「それ程でも」と答えるだろう。かく言う私自身が子供を有明海に連れて行った経験がないのですから。有明海は漁師、行政担当者、建設業者、研究者、芸術家といったプロやセミプロの人たちの海で、素人は容易に近づけない海だし、魅力を理解するには相当な知識が必要な海です。迂闊に近づくとか命さえ取られかねない泥干潟に近づくには技と準備がいます。船を座礁させて楽しむ潮干狩と、鹿島の人たちの偉大な発明「ガタリンピック」だけが素人が楽しめる遊びです。ぐるりんネット10年間の活動で有明海のことをたくさん知りましたし、魅力をたっぷりと楽しみました。しかし、設立趣意書に書いた「我々の楽しみを他の地域の人々にも伝えてどう観光に生かすか」といった課題」にまで踏み込めたとはいえません。

それでも確かに種をまくことはできたと思います。11年前に開催した有明海ぐるりんネットキックオフシンポジウ

ムで、環境省の松本総合環境政策局長（当時）から「東与賀干潟のシギ・チドリに飛来数は日本一です。地元でもラムサール登録へ向けて取り組んで欲しい」と宿題を与えられていました。ただ、ノリ漁師さん達が消極的だとの噂や、飛行場でのバードストライクを懸念する佐賀県に気兼ねして二の足を踏んでいました。

3年ほど前、有明海ぐるりんネット会員の竹下さんが佐賀市環境部長に就任し、理事の東島さんが東与賀まちづくり協議会事務局長に就任しました。

二人とも「ラムサール登録に向けた活動」にやる気満々です。「チャンス到来」です。竹下さんが佐賀市を、東島さんが地元東与賀町を動かし、環境省を巻き込んで2年連続でシンポジウムを開催して、気運を盛り上げました。幸い、鹿島市の新籠干潟も手を上げてくれて、一気に二つの干潟をラムサール登録する準備が整いました。ラムサール登録はあくまで方便の一つですが、行政は有明海に関する施策を実施し、地元住民や我々はそれに呼応して活動することで、有明海の魅力発信を持続することができるのではないかと期待しています。6月にウルグアイで開催される国際会議で登録が決定したら、先ずは一緒に戦った仲間達と祝杯を挙げ、はるばる佐賀後まで応援に駆けつけてくれた日本国際湿地保全連合会長の名執さん、霧多布湿原ナショナルトラスト事務局長の伊東さん、その他多くの応援団の皆様に、「やりましたよ」と報告することになります。有明海ぐるりんネットは、10年目にしてこの地域に「世界に登録された」新しい文化を残すことになります。

一つの種は確実にまくことができました。これからも、私たちは、新しい花を咲かせ、実をつけるかを楽しみに活動を続けることにします。

Contents

有明海歳史。	2
魅力の海！有明海に吹く風	3
有明海の10年を振り返って！	6
「有明海問題」を考える	12
ラムサール条約湿地登録2014	16
「私と有明海」	18
2014年度の活動を振り返って	25
NPO法人有明海ぐるりんネットの10年を振り返って	26

文章中の肩書きは全て2015年2月当時のものです。



干潟に沈む夕陽をバックに、愛嬌物のムツゴロウとシオマネキ。それにシギ・チドリなど野鳥も加わり、干潟の上はまるでコンサート会場です。耳を澄まして聞くと有明海の交響詩が聞えて来ます。そして七色に変化するシチメンソウが真っ赤に染まり訪れた人々を魅了しています。有明海は楽しく、知れば知るほど魅力と感動に包まれます。

佐賀県・福岡県・長崎県・熊本県に囲まれた有明海は、全国の干潟の約4割に及ぶ広大な干潟が広がっています。

毎日変化する、色んな表情を見せてくれる有明海に「親しもう」「もっと知ろう」「もっと情報発信をしよう」と平成16年にNPO法人有明海ぐるりんネットを立ち上げました。間もなく10年になろうとしています。

もっと身近に有明海を感じて頂くために、また私達が体感した有明海を後世に伝えるためにもロゴの制作に取り組みました。4県に囲まれた有明海と愛されるムツゴロウを有明海ぐるりんネットが包み活動することを表現しています。

この制作に当たっては、STSプロジェクトの協力により完成致しました。感謝致します。これからは、このロゴマークを先頭に有明海の魅力を発信続けたいと思っています。

◎NPO法人有明海ぐるりんネット

有明海を楽しむ。有明海を知る。
有明海を届ける。

●定例会

毎月第一木曜日 18:00～19:30 佐賀市内サガテレビ大会議室
有明海に関する講座とその後は懇親会

●組織

理事 荒牧 軍治
川上 義幸 北島 悦子 大隈 昌子 東島 清司
監事 服部 二郎
会員 30名

●入会

〒840-0041 佐賀市内1丁目5番14号
TEL 090-4774-6611 E-mail aramakig@b3.bunbun.ne.jp

●発行/NPO法人有明海ぐるりんネット

※この冊子は、佐賀県有明海漁業協同組合及び福岡都市圏広域行政事業組合の支援をうけて発行しております。





有明海

Ariake Kai
2015

Vol.10